

エゼキエル書1-3章 「離散の地での神の栄光」

1A 主の栄光 1

1B 神々しい幻 1-3

2B ケルビム 4-21

1C 四つの生き物 4-14

2C 霊を持つ輪 15-21

3B 上におられる方 22-28

2A 主の召命 2-3

1B 反逆の家 2:1-3:3

1C 預言者の存在 1-7

2C 食べる巻き物 2:8-3:3

2B 遣わされた者 3

1C 金剛石のような額 4-11

2C 人々に間に座る預言者 12-15

3C 見張り人 16-21

4C 主の命令による口 22-27

本文

エゼキエル書を読み始めます。1章から3章までを読みますが、他の預言書と同じように、エゼキエルが神に呼ばれて、預言をするように命じられる、神の召命の部分であります。

1A 主の栄光 1

1B 神々しい幻 1-3

1:1 第三十年の第四の月の五日、私がケバル川のほとりで、捕囚の民とともにいたとき、天が開け、私は神々しい幻を見た。1:2 それはエホヤキン王が捕囚となって連れて行かれてから五年目であった。その月の五日に、1:3 カルデヤ人の地のケバル川のほとりで、ブジの子、祭司エゼキエルにはっきりと主のことばがあり、主の御手が彼の上にあった。

エゼキエルが預言を受けたのは、「第三十年」とあります。午前礼拝で紹介したように、これはレビ人が奉仕をすることのできる年齢が、三十歳から五十歳とありますので、彼が主にお仕えする年齢に達したことを意味します。そして場所が、「カルデヤ人の地のケバル川のほとり」です。彼は今、バビロンにいます。バビロンには、ユーフラテス川が流れていますが、ケバル川はその支流または運河であったのでしょうか。そして、「捕囚の民とともにいた」とあります。バビロンによる第二次捕囚、紀元前597年から五年目の時でした。ですから、592年辺りでした。ですから、預言者エレミヤと同時期に彼がいたこととなります。エレミヤより、少し遅いし、もっと若かったことでしょう。そ

して彼は「祭司」です。エレミヤもそうでしたが、エゼキエル書はまさに、主の神殿に仕える祭司が
あずかる恵み、すなわち、主のご臨在する聖所の中に入り、その栄光を見る務めに、彼は幻の中
で味わっていく恵みにあずかります。

そして、「はっきりと主のことばがあり、主の御手が彼の上にあった」とあります。これから主が彼
に言葉を与え、また彼をいろいろなところに移動させますが、主の御手が彼の上であり、エゼキエル
は強い促しと、導きの中で動いていました。

2B ケルビム 4-21

1C 四つの生き物 4-14

1:4 私が見ていると、見よ、激しい風とともに、大きな雲と火が、ぐるぐるとひらめき渡りながら北
から来た。その回りには輝きがあり、火の中央には青銅の輝きのようなものがあつた。

エゼキエルの見たものは、主の御座で仕える天使、ケルビムです。10 章において、彼はこの生
き物がケルビムであつたことを知つたとあります。彼がケバル川のほとりを歩いていると、ケルビム
が現れました。激しい風、大きな雲、火は、みな主ご自身の聖さと力を表しています。詩篇など
の中に、激しい風、雲、火があるところに主の力と威厳が表れていることを認め、ほめたたえている
箇所がありますね。そして神が栄光と威光をもって現れる、顕現される時に、このような現象が起
こります。シナイ山に主が天から降りてきた時がそうでした。

そしてこれが、「青銅の輝きのようなもの」とあります。青銅は、幕屋や神殿にも使われていたも
のですが、外界に接している部分は青銅で造られていました。それは、神の裁きを示します。青銅
の祭壇は、神が罪に対して裁く火を表していました。天におられる神が地に触れる時に、それが裁
きとなって現れます。そしてケルビムが、「北から来た」とあります。主がこれからエゼキエルに与
えられる預言は、エルサレムがバビロンによって滅ぼされることです。バビロンはエルサレムの北
からやって来て、包囲し、攻め取りました。

1:5 その中に何か四つの生きもののようなものが現われ、その姿はこうであつた。彼らは何か人
間のような姿をしていた。1:6 彼らはおのおの四つの顔を持ち、四つの翼を持っていた。1:7 その
足はまっすぐで、足の裏は子牛の足の裏のようであり、みがかれた青銅のように輝いていた。1:8
その翼の下から人間の手が四方に出ていた。そして、その四つのものの顔と翼は次のようであつ
た。1:9 彼らの翼は互いに連なり、彼らが進むときには向きを変えず、おのおの正面に向かつてま
っすぐ進んだ。

ケルビムの姿であります、「四」という数字が顕著に出てきますね。四つの生き物であり、四つ
の翼を持っていて、それぞれが四つの顔を持っています。まず、これは地の四方を表しているでし
ょう(黙示 7:1 参照)。ケルビムの上に座してられる主は、地上に隔々にまでおられる方であり、

関わりを持っておられる方です。さらにこの四方は、主ご自身の至聖所も表しているでしょう。神の幕屋において、至聖所は立方体でした。そして、黙示録の最後に出てくる新しいエルサレムは立方体です。そしてイスラエルが荒野の旅をしている時に、その宿営が東西南北になっていたことを思い出してください。それぞれの方角に三つの部族が宿営していました。その真ん中に幕屋があり、主が住んでおられました。つまり主は御座を持っておられて、四方に、地上に遍く関わっておられることを意味しています。

ここの幻においては、ケルビムは基本的に、人間のような恰好をしています。つまり、知性をもった存在であり、高度な知性を持っています。「ような」と言って、決してそれではないことを知るのはいけません。天の存在をエゼキエルは一生懸命、人間の言葉で言い表しているのですが、言いつくすことはできていません。けれども、足はまっすぐで子牛の足の裏のような恰好をしています。翼があるのは、ケルビムや他の天使の特徴です。私たち人間と違って、すばやく動くことができます。そのためなのでしょうか、方向を変えずに、すばやくそのまま動けるようにしています。

1:10 彼らの顔かたちは、人間の顔であり、四つとも、右側に獅子の顔があり、四つとも、左側に牛の顔があり、四つとも、うしろに鷲の顔があった。

興味深い顔の描写です。これらは、神の造られた者たちの長を表しているのでしょう。午前礼拝で見たように、主は今、虹のような輝きもって現れておられます。それは、ノアの洪水の後の姿のようです。主とノアとの契約は、人に対するものだけでなく、生き物に対するものでもありました。「創世 9:16 虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。」とあります。創世記には、生き物は、陸にいる野の獣がいました。そして、家畜がいます。それから空には鳥を造られました。人間が神の最高傑作であることは言うまでもないですが、ここにいる獅子ですが、野の獣の中の王のような存在です。そして、牛は家畜の代表的存在です。主に対するいけにえも、牛を捧げることから始まります。そして、鳥の世界の王のような存在は鷲であります。主がご自分の造られたそれらの動物に、力と威厳を備えておられます。

また教会史においては、イエス様の四つの福音書を示しているという解釈があります。同じイエス・キリストの生涯を描いているのですが、その強調点が異なります。王なるキリストはマタイが描きました。獅子です。しもべなるキリストはマルコが書きました。もくもくと働く牛です。完全な人間としてのイエスをルカが描きました。人間の顔です。そして神の栄光を持つイエスをヨハネが描きました。天にはばたく鷲です。

1:11 これが彼らの顔であった。彼らの翼は上方に広げられ、それぞれ、二つは互いに連なり、他の二つはおのおののからだをおおっていた。1:12 彼らはおのおの前を向いてまっすぐに行き、霊が行かせる所に彼らが行き、行くときには向きを変えなかった。1:13 それらの生きもののようなも

のは、燃える炭のように見え、たいまつのように見え、それが生きものの間を行き来していた。火が輝き、その火から、いなずまが出ていた。1:14 それらの生きものは、いなずまのひらめきのよう
に走って行き来していた。

四つの翼については、二つが上方に広げられています。翼は互いに重なり合っていますが、基本的
に上を向いています。これは主に栄光を帰している姿です。そして、他の二つが体を覆ってい
ます。これは、へりくだっている姿、礼拝している姿です。私たちが礼拝の心構えを持っていた
です。そして、燃える炭、たいまつのようなものが行き来していますが、幕屋や神殿における祭壇を
思い出しますね。そして、稲妻のようなものがでてきています。これもまた、主の聖さや威光、力を
表しています。私たちが稲妻が天から落ちてきた時、恐ろしくなって、家の中に閉じ困ります。同じ
ように私たちが何も知らないことを語り、高ぶるのではなく、口を閉ざし、主の前に静まることを教
えてくれます。

2C 霊を持つ輪 15-21

1:15 私が生きものを見ていると、地の上のそれら四つの生きもののそばに、それぞれ一つずつ
の輪があった。1:16 それらの輪の形と作りは、緑柱石の輝きのようで、四つともよく似ていて、そ
れらの形と作りは、ちょうど、一つの輪が他の輪の中にあるようであった。1:17 それらは四方に向
かって行き、行くときには、それらは向きを変えなかった。1:18 その輪のわくは高く、恐ろしく、
その四つの輪のわくの回りには目がいっぱいついていて。1:19 生きものが行くときには、輪もそ
のそばを歩き、生きものが地の上から上がるときには、輪も上がった。1:20 これらは霊が行かせ
る所に行き、霊が行かせる所には、輪もまたそれらとともに上がった。生きものの霊が輪の中にあ
ったからである。1:21 生きものが行くときには、輪も行き、生きものが立ち止まるときには、輪も立
ち止まり、生きものが地の上から上がるときには、輪も共に上がった。生きものの霊が輪の中にあ
ったからである。

ケルビムが車輪を持っています。なぜなら、ケルビムの上に主なる神の御座があり、それを運ん
でいるように動いているからです。それは、緑柱石のような輝きを持っていますが、神の御座の輝
きを示しています。そして、目がいっぱいついていて。ゼカリヤ書にも、黙示録にも、目がついて
いる存在がでてきますが、これは全てを見ておられる主の働きを示しています。黙示録では、御霊
を示しています(5:6)。そして霊が行く所に輪も行きます。これは御霊が動いておられるところに、
ケルビムも行くことを示しているでしょう。

3B 上におられる方 22-28

1:22 生きものの頭の上には、澄んだ水晶のように輝く大空のようなものがあり、彼らの頭の上の
ほうへ広がっていた。1:23 その大空の下には、互いにまっすぐに伸ばし合った彼らの翼があり、
それぞれ、ほかの二つの翼は、彼らのからだをおおっていた。1:24 彼らが進むとき、私は彼らの
翼の音を聞いた。それは大水のとどろきのようであり、全能者の声のようであった。それは陣営の

騒音のような大きな音で、彼らが立ち止まるときには、その翼を垂れた。1:25 彼らの頭の上方の大空から声があると、彼らは立ち止まり、翼を垂れた。1:26 彼らの頭の上、大空のはるか上のほうには、サファイヤのような何か王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。1:27 私が見ると、その腰と見える所から上のほうは、その中と回りとが青銅のように輝き、火のように見えた。その腰と見える所から下のほうに、私は火のようなものを見た。その方の回りには輝きがあった。

ケルビムの上に主なる神の御座があります。そこは水晶のように輝く大空のようなものです。またサファイヤのように見える王座があります。そこに座しておられます。主がシナイ山に天から来られた時も、黒雲、稲妻、火が立ち上っていましたが、長老たちが少し近くまで行くことが許された時に、彼らは次の情景を見ました。「出エジプト 24:10 そうして、彼らはイスラエルの神を仰ぎ見た。御足の下にはサファイヤを敷いたようなものがあり、透き通っていて青空のようであった。」そして、翼の音が、大水の轟のようであり、全能者の声のようなものであるというものです。これもまた、私たちは主ご自身の威光と力を思わずにはいられません。そしてケルビム自身も主ご自身の声があると、彼らも翼を垂れて、その音を立てるのをやめます。そして、主の御座のところはサファイヤのようなものでしたが、足元は青銅や火で輝いています。地に近づいたところでは裁きになるという原則です。

これらの描写が黙示録で使徒ヨハネが体験したことにとっても似ていることを知るでしょう。いや、ヨハネがエゼキエルと似たような体験をした、と言ったほうが正しいです。ヨハネはエゼキエルだけでなく、ゼカリヤが体験したようなことも、ダニエルが体験したようなことも合わせて体験しています。ケルビムも、黙示録 4 章において出てきて、そこに主の御座があります。こうして、天が開けて、主の栄光をエゼキエルは見えています。主イエスが地上に来られた時も、天からの栄光が輝きましたし、主ご自身がバプテスマを受けられた時も天が開けて、そして聖霊が降りてこられました。そして黙示録にも、天が開けて主が栄光をもって現れる、ということがあります。私たちも聖霊によって、主の栄光の臨在にあずかりたいですね(エペソ 1:17-19)。

1:28 その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。そのとき、私は語る者の声を聞いた。

主の栄光を見て、その前でひれ伏して、それから主の声を聞きます。主が預言者としてエゼキエルを召し出します。ここは大事です、主に用いられている預言者や使徒は、主の栄光を見て、それから主に命じられています。イザヤは同じように主の御座の姿を見て、自分が汚れていることを知り、そして祭壇からの炭火で清められ、遣わされました。使徒パウロは、ダマスコへの途上で主イエスご自身にお会いして、それで目が数日、見えなくなるようになり、そこで主に語られて、福音を伝えました。私たちが主の働きをする、主の言葉を語るのは、すべて主の栄光とその主権、力、聖さにあずかっているかどうかに関わります。それで主の命令によってのみ、自分がそこにへりくだ

って応答するところにあります。自分で何かをやりたいという野望ではないのです。

2A 主の召命 2-3

ですから、私たちは主から召されることについて学びます。エゼキエルがどのように神に召されているか、そこから私たちがどのように主に仕えていけばよいのか、その本質を知ります。

1B 反逆の家 2:1-3:3

1C 預言者の存在 1-7

2:1 その方は私に仰せられた。「人の子よ。立ち上がれ。わたしがあなたに語るから。」2:2 その方が私に語りかけられると、すぐ霊が私のうちにはいり、私を立ち上がらせた。そのとき、私は私に語りかけることばを聞いた。

霊が入ったとあります。主がご自分の霊によってエゼキエルを動かしている姿です。使徒ヨハネも黙示録で同じような扱いを受けています。

2:3 その方は私に仰せられた。「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの民、すなわち、わたしにそむいた反逆の国民に遣わす。彼らも、その先祖たちも、わたしにそむいた。今日もそうである。2:4 彼らはあつかましくて、かたくなである。わたしはあなたを彼らに遣わす。あなたは彼らに『神である主はこう仰せられる。』と言え。2:5 彼らは反逆の家だから、彼らが聞いても、聞かなくても、彼らは、彼らのうちに預言者がいることを知らなければならない。2:6 人の子よ。彼らや、彼らのことばを恐れるな。たとい、あざみといばらがあなたといっしょにあっても、またあなたがさそりの中に住んでも、恐れるな。彼らは反逆の家だから、そのことばを恐れるな。彼らの顔にひるむな。2:7 彼らは反逆の家だから、彼らが聞いても、聞かなくても、あなたはわたしのことばを彼らに語れ。

主はエゼキエルに対して、はっきりと「反逆の国民に遣わす」と言われました。主のことばを語るのは、「彼らが聞くから」ということではありません。「彼らが聞いても、聞かなくても」と主は言われていますね。私たちは、聞いてくれるからなんぼ、とってしまいます。けれども、主に召されることはそうではありません。パウロはテモテに、「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。(2テモテ 4:2)」と言いました。だから、主から召されていることが死活的なのです。主の働きをしていて、人々の反応が悪い時にそれでも自分を支えるのは、唯一、「主が命じられたから」という内側の確信だけだからです。そして、目的が違うのです。「彼らのうちに預言者がいることを知らなければならない。」とあります。主の言葉によって、主がここにも生きておられること、彼らがどんなに反発しても、彼らにとってどんなに不快でも、それでも主がそこにおられて、語っておられることを知るためなのです。これが、私たち聖徒が存在している理由です。主の聖さが、私たちがいることによって示されます。そして人々がどう反応しようが、主は、「わたしが主であることを知りなさい。」ということをおの人に語りかけておられるのです。

そして、「彼らのことばを恐れるな。」とあります。反発され、反対されれば、もちろん私たちの心には恐れが来ます。どういわれるか知れない、と思います。それで主は恐れるな、ひるむなど言われます。エゼキエル書から説教をしたチャック・スミスの音声を聞いたのですが、興味深かったです。彼は、受け取る手紙について、仕分けをしていたそうです。同じ説教の内容なのですが、ひどく怒り、批判をし、非難している内容のものがあります。それと、恵みを受けた、感謝しているというものがあります。同じ言葉なのですが、このように二つの反応があります。これを仕分けしていたということです。批判や非難を恐れて、言うべきことを言わないということがあってはならないということです。

2C 食べる巻き物 2:8-3:3

2:8 人の子よ。わたしがあなたに語ることを聞け。反逆の家のようにあなたは逆らってはならない。あなたの口を大きく開いて、わたしがあなたに与えるものを食べよ。」2:9 そこで私が見ると、なんと、私のほうに手が伸ばされていて、その中に一つの巻き物があった。2:10 それが私の前で広げられると、その表にも裏にも字が書いてあって、哀歌と、嘆きと、悲しみとがそれに書いてあった。3:1 その方は私に仰せられた。「人の子よ。あなたの前にあるものを食べよ。この巻き物を食べ、行って、イスラエルの家に告げよ。」3:2 そこで、私が口をあけると、その方は私にその巻き物を食べさせ、3:3 そして仰せられた。「人の子よ。わたしがあなたに与えるこの巻き物で腹ごしらえをし、あなたの腹を満たせ。」そこで、私はそれを食べた。すると、それは私の口の中で蜜のように甘かった。

興味深いことに、巻き物、神の言葉を食べなさいと命じておられます。食べたら、満腹し、満腹したら、行きます。行ったら、告げます。まさに、その四つの段階は、私たちが神の言葉を人々に語る時に通る四段階です。主の言葉を食べるのです。ある韓国のクリスチャンの方が言っていましたが、日本人は「御言葉を読む」という言い方をしますが、韓国では「御言葉を食べる」と表現するのだそうです。そうですね、私たちが御言葉を読んでいても、それが身になっていないことが多々あります。それは行かないによって自ずと現れます。その人の一部になっているかどうか、それが大事です。そして、御言葉によって満ちます。私たちはたくさん食べて、それによって満たされ、魂を満足させます。この過程があつてこそ、外に向かって働きかけることができますね。「コロサイ 3:16 キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」そして、3章 1 節に、「行きなさい」とあります。イエス様も弟子たちに、「行って、すべての国民を弟子としなさい。」と言われました。行かないといけません。そして語ります。

その巻き物ですが、「哀歌と、嘆きと、悲しみとがそれに書いてあった」とあります。主がこれからエゼキエルに語らせる言葉は、エルサレムが破壊されるという哀歌、嘆き、悲しみであります。けれども、腹ごしらえする時に、エゼキエルにとっては、「口の中で蜜のように甘かった。」とあります。その言葉がどんな内容であっても、主の言葉は口に甘いということでしょう。「主への恐れはきよく、

とこしえまでも変わらない。主のさばきはまことであり、ことごとく正しい。それらは、金よりも、多くの純金よりも好ましい。蜜よりも、蜜蜂の巣のしたたりよりも甘い。(詩篇 19:9-10)」

しかし、黙示録ではヨハネが同じように巻き物を受け、それを食べるように命じられた時は、「それは口には蜜のように甘かった。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。(10:10)」とあります。それは、主の言葉は甘く、将来の希望を与えるものですが、しかしその過程は痛々しいもの、苦々しいものであるはずでありません。私たちに主は、このような重荷を与えておられます。希望の言葉がありますが、その中で罪というものに対処するには、苦々しさ、痛みや悲しみが伴います。ある聖書学者が話していました、「聖書預言セミナーには、多くの人がやって来て喜んで聞いている。けれども、預言の目的は、その言葉を聞いて、心で受け入れ、人々が裁かれる、滅んでしまうという重荷が与えられ、それで人々に福音を伝え、神に仕えることです。そのことをする人は少ない。つまり、口には甘いのですが、腹にまで入れるとそれは苦くなります。」そうなのです、人々の現実の姿、神に裁かれてしまう頑なさにも直面して、それでも労苦して主に仕えるのです。

2B 遣わされた者 3

1C 金剛石のような顔 4-11

3:4 その方はまた、私に仰せられた。「人の子よ。さあ、イスラエルの家に行き、わたしのことばのとおりにならぬに語れ。3:5 わたしはあなたを、むずかしい外国語を話す民に遣わすのではなく、イスラエルの家に遣わすのだ。3:6 あなたを、そのことばを聞いてもわからないようなむずかしい外国語を話す多くの国々の民に、遣わすのではない。もし、これらの民にあなたを遣わすなら、彼らはあなたの言うことを聞くであろう。

ここで言っている外国語を話す民とは、アッシリヤ人とか、カルデア人とかのことです。表向きは、イスラエルの家の者でなければ、神についての事柄は伝えても分かってもらえないと思います。けれども主は、むしろ彼らに話すのであれば、むしろ彼らは受け入れ信じるであろう、ということです。これは知的な理解の問題ではないからです。同じことは、しばしば起こりました。ヨナ書において、ニネベの人々が悔い改めるところを読みます。そして、申命記 32 章 21 節には、「わたしも、民ではないもので、ねたみを引き起こし」と主は言われています。外国人のほうにむしろ聞き入るであろう、ということです。

これは、福音を語る時、御言葉を語る時によく起こることです。知識を持っているからこそ、近いからこそ、むしろ神の愛から遠ざかることが起こります。イエス様はナザレの町の会堂で語られ、その不信仰に驚かれました。そしてパウロもユダヤ人の会堂で福音を語り、ユダヤ人は妬み、異邦人が福音を受け入れました。選ばれている民だからこそ、近いからこそ、むしろ心を頑なににして、聞き入れないということが起こります。ゆえに、私たちはこのような矛盾に満ちた人間の心に語りかけるように命じられており、それゆえ神の召しが必要なのです。

3:7 しかし、イスラエルの家はあなたの言うことを聞こうとはしない。彼らはわたしの言うことを聞こうとはしないからだ。イスラエルの全家は鉄面皮で、心がかたくなだからだ。3:8 見よ。わたしはあなたの顔を、彼らの顔と同じように堅くし、あなたの額を、彼らの額と同じように堅くする。3:9 わたしはあなたの額を、火打石よりも堅い金剛石のようにする。彼らは反逆の家だから、彼らを恐れるな。彼らの顔にひるむな。」3:10 その方は私に仰せられた。「人の子よ。わたしがあなたに告げるすべてのことばを、あなたの心に納め、あなたの耳で聞け。3:11 さあ、捕囚になっているあなたの民のところへ行って、彼らに告げよ。彼らが聞いても、聞かなくても、『神である主はこう仰せられる。』と彼らに言え。」

大事ですね、人々の心の頑なさがありますが、その反対や反発にひるむことのない強さを主に語る者に与えてくださいます。鉄面皮に対して、彼の額を金剛石、つまりダイヤモンドのようにされます。神の言葉を語る時は、譲歩することはありません。聞いている者が反発するのであれば、益々、神の真理をまっすぐに語ります。ある説教者が、牧師の資格としてこう言いました。「学者のような知性、子供のような心、さいのような皮膚(Qualifications of a pastor: the mind of a scholar, the heart of a child, and the hide of a rhinoceros.)」知性は、聖書の言葉をじっくりと解き明かす、すぐれた知性が必要です。心は幼子のように素直で、キリストの福音に感動します。そして動物の犀の分厚い皮膚のように、やかましい批判には厚かましく、図太くなります。

そしてここで主は、「すべてのことばを、あなたの心に納め、あなたの耳で聞け。」と言われます。それから、「言え」と命じられます。全て受けたこと、聞いたことを語ります。パウロは、「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。(1コリント 11:23)」と言いました。主から受けた者を分かち合う、伝えるのです。

2C 人々に間に座る預言者 12-15

3:12 それから、霊が私を引き上げた。そのとき、私は、うしろのほうで、「御住まいの主の栄光はほむべきかな。」という大きなとどろきの音を聞いた。3:13 それは、互いに触れ合う生きものたちの翼の音と、そのそばの輪の音で、大きなとどろきの音であった。3:14 霊が私を持ち上げ、私を捕えたので、私は憤って、苦々しい思いで出て行った。しかし、主の御手が強く私の上のしかかっていた。3:15 そこで、私はテル・アビブの捕囚の民のところへ行った。彼らはケバル川のほとりに住んでいたの、私は彼らが住んでいるその所で、七日間、ぼう然として、彼らの中にとどまっていた。

主が半ば、引っ張り出すようにして、御霊によってエゼキエルを動かされました。その背後には、あのケルビムの存在がいます。主の栄光が素晴らしいことを唱っています。その素晴らしい天にいますようなところから引き離されたので、彼は、「私は憤って、苦々しい思いで出て行った。」とあります。これはちょうど、高い山に登ってイエス様の栄光の姿を見た、ペテロ、ヨハネ、ヤコブが麓に降りなければいけないようなことだと思えます。いつまでも主の栄光の余韻に浸りたいと願ひ

ます。しかし、現実があります。自分が主によって遣わされているところに行かなければいけません。主の栄光のところから引き離されたので、彼は憤りを感じて、苦々しく思いました。しかし、主が今、自分を動かしておられるのです。主の御手が重くのしかかっています。そして彼は、「テル・アビブの捕囚の民のところへ行った」とあります。イスラエルの町のテル・アビブのことではありません。ケバル川のほとりにある町です。そこでそこにいるユダヤ人の間にいたのですが、何も語らず、呆然として一週間を過ごしました。主の栄光の姿を見、そして主から強い召命を受けて、その衝撃が強かったのでしょう。

そしてもう一つ、彼は自分の語る人々、その生の人々のところで座っている必要がありました。これは主に御言葉を語る者たちのしなければいけないもう一つのことです。人々の間に座ることです。つまり、その人々の声を聞くことです。自分が主の言葉を語る前に、彼はその語る人々の声を聞いていました。そこで、人々が何を思い、感じ、どういうところを通っているのかを知り、理解することができました。基本的に、これが、イエス様が肉体を取られ、人々の間に住まわれた理由です。主は神の栄光の輝きそのものでしたが、人々の間に住まわれました。ご自身が肉体の弱さを身にまとわれたのです。

3C 見張り人 16-21

3:16 七日目の終わりになって、私に次のような主のことばがあった。3:17 「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くと、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。

エゼキエルの別名と言ってもよいでしょうか、彼は、「ザ・見張り人」です。主の言葉を語るだけでなく、人々に対して語るのです。人々の状態を知りながら、なおのことそれでも主から語られたことをそのまま伝えるのです。神の真理を知ることは、大事です。けれども、神の真理をそのまま、人々に対して語ることはまた別のことです。これは日本語を話すことと、これを日本語の話者ではない外国の人に教えることの違いと言ったらよいでしょうか。外国の人がどの部分を知らないのか、それをよく理解して、彼らの理解や知識の中で、いかに日本語の文法や用法を伝えなければいけないのかは、また別の技能が必要ですね。見張り人も同じです。人々の思いや行ないを知って、神の言葉が彼らのどこに当てはまるのかを、はっきりと伝えて、それで聞いた人が応答できるようになります。

皆さんは基本的に、見張り人です。今、置かれているところ、職場であったり、家庭であったりします。そこでご自身も周りの人々と同じように、感じて、思っています。そこに聖書によって、また教会を通して神の言葉が与えられます。神の言葉が自分の物となった時に、その思いや考え、感じていることに光が与えられ、そしてそれが預言の言葉となります。

3:18 わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者

に悪の道から離れて生きのびるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。3:19 もしあなたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を悔い改めず、その悪の道から立ち返らないなら、彼は自分の不義のために死ななければならない。しかしあなたは自分のいのちを救うことになる。3:20 もし、正しい人がその正しい行ないをやめて、不正を行なうなら、わたしは彼の前につまずきを置く。彼は死ななければならない。それはあなたが彼に警告を与えなかったので、彼は自分の罪のために死に、彼が行なった正しい行ないも覚えられないのである。わたしは、彼の血の責任をあなたに問う。3:21 しかし、もしあなたが正しい人に罪を犯さないように警告を与えて、彼が罪を犯さないようになれば、彼は警告を受けたのであるから、彼は生きながらえ、あなたも自分のいのちを救うことになる。」

今、読んだ主の言葉は、エゼキエル書において 33 章で繰り返される言葉です。彼が新たに語る時に、主が与えられたとても大切な原則です。召命の原則と言ってよいでしょう。パウロは同じことを、こう言いました。「1コリント 9:16 というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならないことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわざに会います。」主が語るように命じられたことを語ることで、責任を取られるのであり、相手が聞いて、悔い改めることによって報いを受けるものではありません。ここは大切な部分です。一つに、語らなければ全ての人が罪の中で死ぬということがあります。語れば、もしかしたら悔い改める人が出てくるかもしれません。しかし、語らなければ必ず、罪の中で死んでしまいます。もう一つは、語っても悔い改める訳ではないということです。悔い改めないからといって、自分を責めることはありません。いやむしろ、主の憐れみがなければ、人は悔い改められないのです。拒むことのほうが圧倒的に多いです。ですから、悔い改める訳ではないということを知るべきです。

さらに、もう一つ大事な原則があります。それは、「神が救うのは、へりくだっている人」であるということです。正しい人と悪者がいます。正しいからといって救われません。もし、かつて正しいことをしていても、今、悪いことをしてれば、過去の正しいことを神は数えられないのです。同じように、悪者だからといって滅びるとは限りません。過去に悪いことをしていたとしても、今、悔い改めてへりくだり、罪から離れようとしているのであれば、主は豊かにこれまでの悪いことを赦されます。

4C 主の命令による口 22-27

3:22 その所で主の御手が私の上にあった。主は私に仰せられた。「さあ、谷間に出て行け。そこでわたしはあなたに語ろう。」3:23 私はすぐ、谷間に出て行った。すると、そこに、主の栄光が、かつて私がケバル川のほとりで見た栄光のように、現われた。それで私はひれ伏した。

主は、人々の住むテル・アビブのところからさらに、谷間に動かされます。谷間は、云わば、外国の勢力に囲まれていることを象徴しています。ゼカリヤ書 1 章に、谷間の幻があり、それは外国の勢力に踏みにじられているエルサレムを表しています。エゼキエル書 37 章も同じく、谷間に干か

らびた骨がありますが、それも諸国の中で死んでしまっているようになっていた民の姿を示しています。

3:24 しかし、霊が私のうちにはいり、私を立ち上がらせた。主は私に語りかけて仰せられた。「行って、あなたの家に閉じこもっていろ。3:25 人の子よ。今、あなたに、なわがかけられ、あなたはそれで縛られて、彼らのところに出て行けなくなる。3:26 わたしがあなたの舌を上あごにつかせるので、あなたは話せなくなり、彼らを責めることができなくなる。彼らが反逆の家だからだ。3:27 しかし、わたしは、あなたと語るときあなたの口を開く。あなたは彼らに、『神である主はこう仰せられる。』と言え。聞く者には聞かせ、聞かない者には聞かせるな。彼らが反逆の家だからだ。

主はさらに、霊によってエゼキエルが語るができるように整えておられます。しばらく、閉じこもっていなければいけません。基本的に反逆の家なので、彼が何を言っても駄目です。けれども、主が彼に与えられる時があります。その時まで主は彼の口を閉ざされます。主が語れと言われる時まで待つのです。彼の口は、バビロンがエルサレムを包囲する時、エゼキエル書 24 章まで続きます。そしてその時に、エルサレムに対する言葉としては、主は彼の口を閉ざされます。そして 33 章で、エルサレムがバビロンに陥落したことを告げ知らせる人が来た時に、またエルサレムに対する言葉が開かれます。

徹底していますね。主による召しというのが、ここまで主の命令によるものであることがお分かりになったかと思います。自分で語りたいと思って語るのではありません。また自分で語りたくないと思っても、語らないといけない時があります。主がそうしなさいと御霊によって命じられる時に、その導きに抗ってはいけません、語るのです。そして、自分で何か説得しようとしても、それも失敗します。これは、語る賜物だけではなく、奉仕の賜物についても言えるでしょう。行ないなさいという神の命令を聞くときに行い、行なうように言わない時には行わない、待っている必要があります。最後に、主がペテロに語った言葉を分かち合います。「ヨハネ 21:18 まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」今、ご自分は歩きたいところに歩いているでしょうか。それとも、行きたくないところに主によって連れて行かれているでしょうか？どうか、主の召しに応答する者でありますように。